

学びの源泉 三谷 宏治

第53号 なぜ、どうやって、と問うてはいけないとき

#なぜ、どうやって、が大発見をコロす

紀元前 140 年頃、エジプト アレキサンドリアに住むエラトステネスは、気がついた。アレキサンドリアの南にあるシェネ（今のアスワン）では、夏至に太陽が井戸の底を照らすのに、アレキサンドリアではそうならないことを。

彼は「地球が丸い」からだと推論し地球の円周を測ろうとさえした。

アレキサンドリアとシェネ間の距離が 925km。そして夏至の日の太陽高度差はこの 2 都市間で約 7.2 度。そこから導き出された地球の円周は 4.65 万 km。実際の 4 万 km に極めて近い数字と言える。

しかし、その後千数百年の間、この概念も結論も、中世の暗黒の中に押し込められた。

理由は「感覚」と「なぜ・どうやって」だった。

まずは感覚に合わない。丸いとしたら、裏側はどうなるのだ。しかもどこまで行っても一周なんて出来ないぞ。

その原動力（どうやって）も疑われた。

こんな硬い岩を球状に丸めるなんてとんでもない。そんな力はどこにある。球の裏側の人を引っ張っておく力などどこにある。

そういった声に、この偉大な発見と測定結果は封殺された。

マゼランが世界一周して（結果、船内の暦は 1 日ずれていた）地球が丸いことを証明したのが 1522 年、ニュートンが万有引力を「発見」したのは 1687 年だった。

#ヴェーゲナーをコロしたのは誰

1915 年に『大陸移動説』を発表したドイツの気象学者 アルフレート・ヴェーゲナーも、同じ悲哀を味わった。

大学の図書館で世界地図を眺めていて、彼は直観する。

「アフリカ西岸と、南アメリカ東岸の形はあまりにそっくりだ。昔は一体だったに違いない」

動植物の分布から地層・地形・化石・古季候まで、さまざまな証拠を集めて 5 年後、彼は『大陸移動説』を提起したが、強い批判にさらされた。

1929 年には更に多くの証拠を集め、古代の超大陸『パンゲア』の発見を唱えたが、否定され、やがて無視された。

これも「感覚」と「どうやって」の故であった。

年に数センチとは言え、こんな堅く重い大陸が動くなんて信じられない。何よりも、その原動力が分からない。

ヴェーゲナーは遠心力や潮汐力に答えを求めたが、それでは明らかに足りない。

世界中の地理学者・地球物理学者たちが彼を糾弾した。「門外漢の気象学者が何を言うか」と。

1950 年代に発達し、60 年代に完成したプレートテクトニクス理論が、その大陸移動の原動力を解明した。地中深くのマンテル対流により、確かに大陸はゆっくり動く。

70 年代後半には、宇宙測地技術により大陸の動

きが、直接測れるようになった。ハワイは、毎年確実に 60mm ずつ西へと動き、日本列島に近づいていたのだ。

ヴェーゲナーの説が顧みられ賞賛の的となったのはしかし、彼の死後であった。

彼は自説を補強せんがための5度目のグリーンランド探検で 1930 年、命を落としていた。享年 50、失意の中の退場だった。

この世紀の大発見、素晴らしい研究成果、そして稀代の研究者をコロしたのはグリーンランドの寒さではない。

当時の「専門家」たちの感覚（常識）であり「どうやって」の追及が、彼とその大発見を文字通りコロしたのだ。

#発見が先、手段・理由は後

だから、発見（What）が先で、方法や手段、理由（How・Why）は後だ。

面白いものを発見しさえすれば、そこからじっくり探究すればいい。

面白い発見（やアイデア）に対して、決していきなり「なんでだ」「どうやってやるんだ」という質問をぶつけてはいけない。

まずはその発見を喜び、そして「本当にそうなのか」を確かめること。その新発見が確かでさえあれば、きっとその先に、大きな How や Why の発見が眠っている。急がなくていい。

新しいアイデアや発想には定義により前例がない。

当然そのメカニズム（機構と原動力）や因果関係の理解も浅いし証拠もない。

なのに「証拠は？」とか「なんで？」とか「どうやって？」とかぶつけられれば、相手は受けきれぬはずがない。

発見をまずは奨励・賞賛して、手段や理由の探究は後回しにしよう。

業務改革の先進企業であるリコー流に言えば「TTY」だ。

whaT Then whY.

事実が先で、なぜかは後。発見が先で、原因追及は後。

問題自体が分からないときに、なぜ、を繰り返しても意味がない。まずは、発見を続け、問題そのものを見いだそう。

8 月には『発想力』本、出版されます。乞う御期待！

初出：CAREERING. 2009/06/15